

平成二十七年六月十日発行
皇學館論叢第四十八卷第三号 抜刷

井上靖『孔子』覚書——「逝くもの」の彼方に——

半
田
美
永

皇學館論叢 第四十八卷第三号
平成二十七年六月十日

井上靖『孔子』覚書——「逝くもの」の彼方に——

半田美永

□ 要 旨

井上靖の長編小説『孔子』は、黄河流域を放浪する孔子とその弟子たちの物語である。蔦薑と名乗る架空の語り手が設定され、孔子の十四年間の放浪の旅と、戦乱の世にあつて絶望せず、みずからの役割を自覚して、天命を生き抜いた人の生涯が回想的に語られる。作品中には、論語解釈を巡る井上靖の知見が彫琢されるが、本稿では、特に「逝くものは斯くの如きか」の解釈に着目し、また旧都・負函に比重を置く作家の意図についても考察したい。作品には、故地、郷里の語が散りばめられ、また黄河・淮水など、水に繋がるイメージが巧妙に織り込まれている。それらは、作品の主題にどのように関わり、またこの作品を特色付けているのか、蔦薑の語りを通して、それらの問題を考えてみたい。

□ キーワード

井上靖 『孔子』 論語 蔦薑 負函 黄河

はじめに

長編小説『孔子』は、一九八七（昭和六十二）年六月から一九八九（平成元）年五月まで、雑誌『新潮』に連載を挟みながら、計二十一回にわたり連載されて完結した。作者が満八十歳の時に執筆が始まり、八十二歳で完成している。「構想二十年」^(注1)とみずからが言う作品の完成の後、一九九一（平成三）年一月二十九日、急性肺炎を発症して死去。作品は平成元年九月十日に新潮社より函入り単行本として刊行された。『孔子』執筆開始の前年、井上靖は、国立ガンセンターで食道癌の手術を受けていた。そして、同年四月号の『新潮』に発表された随筆「負函」が絶筆となった。次作として構想された『わだつみ』は、ついに実現せずに終わった。

『孔子』執筆中にも何度か現地を訪れるなど、特に井上靖が執着した負函は、知られるように、孔子が「近き者説ひ、遠き者来る」と称えた楚国の旧都である。物語の中では、架空の人物・蔦臺が語り手として描かれ、孔子一行の旅の同行しながら、論語成立の過程と、そこに刻み込まれた思想の根幹を体現しようと努める。孔子が一時滞在した負函を、四十年後の蔦臺が再び訪ねる場面が重要な意味を帯びている。また、この作品の大きな特色は、作者が論語の新注の縛りから離れ、古注に就き、論語を解釈することを意図した点にある。論語に籠められた思想の真意は、孔子の生きた時代に置いてこそ、初めて生命を帯びるのだという作者の根本的な考え方がある。

朱熹以来の新注は、日本の江戸時代以来の教材に用いられ、その教育は勤勉な人材を育成するという目的に適った。そのような論語解釈は、明治以降の我が国の近代化の進展に大きく寄与したとの発想がある。^(注2)しかし井上靖は、そういう考えや教育をも否定せず、世界的な思想のひとつである論語の正しい解釈には、それが成立した時代を知らねば

ならないと考えた。つまり、孔子の生きた時代と、その生き方を知らなければ、論語の正確な解釈は立ち上がって来ないと考えたのである。

井上靖自身、作品執筆中の一九八七（昭和六十二）年十一月に、河南省信陽地区の楚王城遺跡を訪ね、孔子の事績には欠かせない楚国の旧地・負函の場所を特定している。作品『孔子』には、伝承され記録される高弟たちに交じり、語り手としての蔡国出身の、蕩董という架空の人物が設定されている。負函とは、戦禍によって滅んだ蔡の遺民たちが移住させられた街であった。そして蕩董も、その遺民の一人であった。『孔子』は蕩董の語りによって成立する物語である。蕩董の語りを通して、読者は孔子の言葉の真意に近づくとともに、井上靖の八十有余年の生涯を総括する思想の深淵を看取することができるだろう。

本稿では、井上文学の集大成としての『孔子』に描かれる蕩董の負函再訪の意味と、作品中多くの字数を費やされた「逝くものは斯くの如きか」の解釈を中心に、特に考察を進めてみようと思う。

（一）「逝くものは斯くの如きか」の解釈について

『論語』「子罕第九」に収められる「子在川上曰 逝者如斯夫 不舍昼夜」は従来、どのように解釈されてきただろうか。僅か漢字十四文字に秘められた真意の解釈を巡って、どれほどの時の流れと労力が費やされてきただろうか。まず、句読点の打ち方すら、注釈書によって一定ではない。文中の「舍」の訓み方にも「おく」と「やむ」とがある。即ち「昼夜をおかず」と「昼夜をやめず」という具合に、である。句読点の打ち方も、例えば「子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜。」（『新釈漢文大系1 論語』明治書院。『全釈漢文大系1 論語』集英社）、「子在川上曰。逝者如斯

夫。不舍昼夜。」(島田鈞一著『論語全解』有精堂)、「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍昼夜、」(『中国古典文学大系3 論語孟子 荀子 礼記(抄)』(平凡社)等)である。

さて、ではその解釈はどうなっているだろうか。一般によく参考されると思われる身近な注釈書を検討してみることにする。注釈書には、便宜上①～④の番号を付した。

①『中国古典文学大系 第三卷 論語・孟子・荀子・礼記(抄)』(一九七〇年一月二十日、平凡社) Ⅱ「先生が川のほとりでおっしゃった。『過ぎ行くものはこの水の流れの如くであろうか。昼も夜も休む間もない。』」(四十七頁)。

②『新釈漢文大系 第一卷 論語』(昭和三十五年五月二十五日、明治書院) Ⅱ「**【通釈】**孔子が、ある時、川のほとりに居て、流れてやまない川の水をながめて永嘆しているには、過ぎ去って帰らぬものは、すべてこの川の水のようであろうか。昼となく夜となく、一刻も止むこともなく、過ぎ去っていく。人間万事、この川の水のように、過ぎ去り、うつろっていくのだのう。」(二〇四頁)。

③『全釈漢文大系 第一卷 論語』(昭和五十五年五月三十日、集英社) Ⅱ「**【通釈】**孔子が川のほとりで言った。『過ぎゆくものはまさにこのようである。昼も夜も止まることがない』」(二五〇頁)。

④『論語全解』(昭和四十二年三月二十日改装五版(初版は昭和十四年五月二十日)、有精堂) Ⅱ「**【釈義】**孔子が或る時川はらの上に居て、水流が混混として流れて已まないのを見て歎じて曰はれるに、『天地自然が、万物を生育する現象は誠に靈妙で測り知るべからざる者である。此の水を観るに、往く者は過ぎ、来る者は続き、寸時も止まることをしないではないか。斯様に昼となく夜となく、混混として已まず、上は千万年の太古より、下は未来永久、往つたり来たりして絶えることがないとは、なんと微妙なものではないか。人も亦徒に之を觀過してはならない。』

時時刻刻勉めて已まず、天理を存養して以て生を天地に享けて居る本分を欠かぬようにせねばならぬ」と。
(一七七頁)。

因みに『中国名言名句の辞典』(一九八九年一月一日、小学館)には、「去りゆくものはみなこの川の流れのようなものであろうか。昼となく夜となく流れ去って、留まることを知らない。」とあり【無常】の項目に入っている。また『新明解 故事ことわざ辞典』(二〇〇一年十一月三日、三省堂)には、「人の世のうつろいやすさ、人生のはかなさを嘆いたことば。」とある。このように、今日的には孔子の言葉として知られる「逝くものは斯くの如し」は「無常」の譬えとして用いられることが多いようである。

井上靖が活用したという先の③『全釈漢文大系』の〔補説〕にも「いま、孔子は川を前にして『逝く者は』という。心細く、老いて返らぬ人生を見つめている。」と解釈している。晩年の孔子の辿り着いた寂寥の気持ちの説明されているのである。④の『論語全解』では、この章句を、時を無駄にせず、「時時刻刻」勉めねばならないとする自戒の教えであると解釈している。

このような解釈の差異の生じる遠因を、古注と新注に求めて②『新釈漢文大系』の【余説】には、次のような説明がある。

古注と新注とは非常に異なった解釈をしている。古注では、孫綽が「川流舎(や)まず、年逝いて停まらず。時已に晏(おそ)し。而して道なほ興らず。以て憂歎するところなり」といったように、川の水の不断の流れの如く、空しく老いてゆくわが身を、孔子が永嘆したものと解するのである。／新注は、朱子も程子も、極めて哲学的な解釈を下した。天地の化育、日月の流れは一息も止むことがないのは、ちょうどこの川の水の昼夜のへだたなく流れて止むことのないのと同じである。この無限の天地の発展・持続の中に人もまた絶えず発展していく。

学者はこの理を悟って、時々省察して、少しも間断なく努力をしなくてはならぬと解する。(二〇四頁)

つまり、この説明に拠ると、古注に従えば、ここには晩年の孔子の「憂歎」が、また新注に従えば時間を無駄にせず「努力」を奨励する解釈が浮かび上がることになる。そして、孔子の「永嘆」とは「道なほ興らず」と感じる現実であり、わが身の老残そのものを嘆いているのではないということになる。もつとも、同じく【余説】には、「論語全編を貫く思想から推して考えると、古注の方が孔子の真意に近くはないかと思う」として、『新釈漢文大系』の著者・吉田賢抗は、古注の立場をとっている。

井上靖は、古注と新注の相違について、大江健三郎との対談の中で、例えば「子曰。朝聞道。夕死可矣。」(『論語』里仁第四)の例を挙げて、次のような考えを示している。「朝に道を聞けば」が、古注では「朝に道あるを聞けば」とある。つまり「朝に道徳のある国が成立したと聞いたら夕に死んでもいい。これは具体的にはつきりします。江戸のほうで『道ある』の『ある』を取ってしまったっている。『朝に真理を聞けば夕に死しても』こんな抽象的なことは春秋末期の孔子は言わなかったらうと思います。」^(注5)と話している。

孔子の言説を、その十四年に及ぶ放浪の旅に見据えた蔦葦の語りは、一人の人間としての孔子を浮かび上がらせる。そして、ここに描きだされる孔子からは、厭世的な絶望感も拭き取られている。そのような孔子像、あるいは論語理解は、昭和十三年十二月二日に校了し、同年十二月に講談社から出版された、下村湖人の『論語物語』以来のものではなかったか。湖人は『論語物語』において「永遠に流るるもの」の章をたて、「逝くものは斯くの如きか」を次のように解釈している。

水は滾々として流れている。流れの行く末をのみ見つめていた彼は、今や、目を転じて遙かに流れの源を見やうた。そして考えた。

(生命の泉は無尽蔵である。顔回は死んだ。自分もやがて死ぬであろう。しかし、天の意志はやむ時がない。古聖の道は永遠に亡びないであろう。)^(注6)

井上靖の描く『孔子』にも、「天の意志」「古聖の道」は、永遠に続く道として説かれ、また「仁」も高邁理想の観念的な哲理としてあるのではなく、それらの表象は身近な現実の生活のなかに存在していることが説かれている。「いまなぜ孔子か」(『新潮45』第五巻第五号、昭和六十一年五月号)の中で、「私は孔子を小説に書きたい。なぜかと申しますと、私は二十一世紀の『論語』の解釈を書きたいと思うからです。」と述べ、「孔子の心——字句の解釈でなく、この言葉を言った孔子の、その時の心」を読みたいと作者は言う。

『孔子』では、第二章で、蕪薑が「——逝くものは斯くの如きか昼夜を舍(お)かず。／＼このように声に出して誦えさせて頂くと、私の場合は、何とも言えず大きいものが、朗々とした明るいものが、こちらの心に伝わってくるのを覚えます。」といい、それは「子のお心の大きさであり、明るさであると思います。」と説明する。そして、「人間を信じ、人間が造る歴史を信じておられた子の、お心の、お人柄の大きさであり、明るさであります。」と分析する。「逝くもの」に「大きいもの」「明るいもの」を蕪薑に感じさせる「子」の「明るさ」は、「人間を信じ、人間が造る歴史を」、子が信じていたからにはかならない。更に「逝くもの」の彼方には、「大海」が拡がっているという。蕪薑の言葉に「川の流れが大海を目指すように、人間の、人類の流れも亦、大海を理想とする、大きい社会の出現を目指すに違いありません。」とある。

先に引用した「いまなぜ孔子か」(前出)に、孔子が人間を信じた理由を、井上靖は、次のように推測している。

私は蔡丘会議が守られて、春秋、戦国時代を通じて、黄河の堤防が人為的に切られなかったことは、人類の英知だったと思います。孔子はそこから人間を信じたのかも知れません。蔡丘のあたりを孔子が二回にわたって通っ

たのは、同会議が開かれた小さい丘に敬意を表したかったからと思えてなりません。私も一昨年、蔡丘に行つてまいりました。桐の林に取り巻かれた小さい、しかし美しい丘で、私もまたそこで二千何百年前の会議に敬意を表してきました。

作品の中では、第一章に、「私が子を初めて遠くに拝した時、子が足をお運びになつていたあの丘が蔡丘という丘であり、子がお生まれになる丁度百年前（註、紀元前六五一年）に、斉の桓公を中心に魯、宋、鄭、衛など、当時中原に覇を争つていた国々の為政者たちが、他ならぬあの蔡丘に会して、黄河の堤防を曲ぐることなき盟を結んでいるということを知つた」と記載される。そして、蔦薑が奥山の里に引き籠つてから二十年程経つて、斉国の故事に詳しい人から、そのことを聞いて知つたという、物語の筋立てに活用されている。

黄河の堤防は切り崩すことにより、流域を破壊する武器となる。盟約とは、黄河を戦略に用いないとする国の約束事であり、「黄河の水」を「兵器」として使用しない盟約を、自分が中心になつて成立させた折の桓公には、子もまた素直に頭をお下げになつたのではないかと思われます」と蔦薑は推測している。「子は五十五歳の時、魯をあとにして、亡命・遊説の旅にお出ましになり、それは十四年の長きに亘つております。その五年目に、私は子に蔡丘でお目にかかることができた」と、みずからが孔子と出会つた時と場所とを語っている。また、孔子が十四年間の約半分を、この衛の国に滞留したのは、この盟約が守られ、衛の民たちに水の恩恵の伝わるのを 見守つていたからではないかとも推測している。

蔦薑は、孔子一行の旅の途中から参加した人物として設定される。その出会いの場は、蔡丘会議の開かれた場所であり、平和と人間の信頼を象徴的に物語る蔡丘であつたのである。蔦薑は今、孔子と、その一門の亡き後、山深い里で孔子の教えを説き、その教えを実践しようとしている人物である。

(二) 蔦薑とは何者か

『孔子』は第一章から第五章で構成される長編である。終戦直後に執筆された「漆胡樽」(『文学雑誌』昭和二十二年五月)以来、ほぼ十年の期間を置いてから書き継がれた「天平の墓」(『中央公論』昭和三十二年三月～八月)、「楼蘭」(『文藝春秋』昭和三十三年七月)、「敦煌」(『群像』昭和三十四年一月～五月)、「蒼き狼」(『文藝春秋』昭和三十四年十月～三十五年七月)など、中国を舞台とする一連の歴史小説群より、更に三十年後に『孔子』は書かれたのである。^(注7)

全五章立ての、この長編作品を俯瞰すると、大きく三部に分けられるようである。第一章では、語り手の蔦薑が、みずからの来歴を語る場面、第二章から第四章は、山里に居を移した蔦薑が孔子の詞の解釈や思想を人々に講釈する場面、そして第五章は、師・孔子との思い出の場・負函を蔦薑が再び訪れる場面である。全五章、三部立ての考え方は、先の対談中、大江健三郎も「第一部では、孔子が自分を評価してくれるはずだった政治家の死にめぐりあつて、断念して故国に帰ろうとする。」、そして「第二部では、孔子の思想を、研究会を開いてみんなで考えるところになります。」と発言している。また第三部では、その弟子がもう一度旅行に行つて「若い時に孔子と一緒に立った場所へと立ち戻る」といった内容だと整理している。

また、曾根博義氏が指摘するように、「全体は孔子というよりむしろ蔦薑の物語といった趣を呈する」^(注8)が、物語そのものは、孔子が他界して三十三年の歳月が流れた場面から始まり、次第に、蔦薑の物語としての色彩が濃くなつてゆく。孔子が歿したとき、蔦薑も他の門弟衆とともに、「あの都城の北方、泗水のほとりに築かれた墓所の付近に庵」を結び、そこで「心喪三年に服し」たのであった。今、彼は山深い里に居を移し、そこで村の人たちを相手に師の教

えを説きながら暮らしている。「墓所から遠く離れてこそおれ、一生、命のある限り、ここで亡き師にお仕えしようと思つている」という、蕙薑の心境が綴られている。物語は、ここに至るまでの、彼の回想の形で進められるのである。

作中、蕙薑について、次のような説明がある。長くなるが引用してみよう。それは、蕙薑が現在に置かれた自己の立場を、みずからが陳述する場面である。

私でございますか、私は顔回より五歳年下であります、いつか顔回より三十年、子路より八年という歳月を長く生きてしまい、今や七十三歳で亡くなられた師・孔子の没年にさへ近付こうとしております。馬齢を重ねるというのはこのことで、まことにお恥ずかしい次第でございます。が、これも天の然らしむるところ、与えられた生を私は私なりに、思い邪なく生きて行こうと思つております。／＼ご覧の通り、今は隠者まがいの日々、僅かな田畑を耕し、なるべく世の汚れに染まらぬようと、ただそれだけを心掛けて、その日その日を自分本位に送つております。併し、お心の広い子はお咎めにはならぬであります。お前はそれでいい、そういう子のお声が聞こえてまいります。大体、子も本当は現在の私を送り迎えしているような毎日をお持ちになつた。お持ちになりたくて堪らなかつた！私には、私だけには、そうした子のお心の内がよく判つております。(第一章。なお作品中、孔子は「子」と表記されるので、本稿でも特に支障のない限り、そのように表記する。)

孔子の高弟である子路は六十三歳、顔回は四十一歳で子に先立つた。子貢は、子亡き後、三年の喪に服した後更に三年、併せて六年の喪に服したという。他の七十人程の弟子は、三年の服喪を終えると、思い思いに各地に散つて行つた。子貢は四十六歳。一人で、その後の子の墓所に仕えた。子貢の経済的な援助がなければ、三年間の服喪も叶わなかつたと蕙薑は考へている。彼は、そのような子貢らしい子への仕え方に強く心を惹かれながらも、とても真似

は出来ないと思う人物である。そして、「墓所から遠く離れてこそおれ、一生、命のある限り、ここで亡き師にお仕えしようと思っている」のであった。

薦葦の理解によれば、孔子もまた「本当は」今の自分のように「隱者」^(注9)として「僅かな田畑を耕し」、「世の汚れに染まらぬように」生きたかったに違いないという。そうしなかったのは、あるいは出来なかつたのは、紊れに紊れたこの世から、一人でも不幸な人がなくなるようにとの思いからであった。人と共に生きるということに、孔子の主眼があつた。それを、みずからに課した「天命」と悟り、決して他に自分の考えを押し付けることはなかつたという。「天命とは難しい質問でございます。ありのままを申し上げれば、子のお口から出たお詞で、私などには一番難しく、一番怖ろしく感じられるお詞でございます」。

子がなくなつてから三十三年。薦葦が、この「奥山の里」に入つてから三十年の歳月が流れて、今なお、子晩年の「天命」という詞を想い出している。年若い弟子たち——子夏、子張、子游たちは、それぞれに故地に帰つた。彼らによつて、黄河や淮水のほとり、中原の各地で子の教えは広まってゆくだろうと、薦葦は思った。それでは、薦葦はどのようにして孔子に接触したのか。彼の出生はどうなつてゐるのか。以下、第一章に描かれる、薦葦の回想を通して、もう少し詳しく検証してみたい。

薦葦は、途中から孔子一行に加わつた人物であり、他の門弟たちとは立場が違つてゐた。生国は蔡の国。蔡は、殷の遺民を統治するため周の武王の弟・蔡叔度が潁水、汝水のほとりに封じられたことに始まると伝えられる。しかし、薦葦が生まれ育つたのは、その後建てられた新蔡という新しい国であつた。かつての都城は汝水の上流の上蔡という国である。大国楚によつて翻弄される、彼の生国もまた、小国としての多難な歴史を背景に抱えているが、その血筋を辿ると元は殷の子孫だということになる。^(注10)

孔子が五十五歳の時、魯を後にして亡命・遊説の旅に出た。その五年後に、蔣薑は、蔡丘で、この孔子の旅の一行に出会うことになったのである。あの盟約が結ばれてから二百年、世は変わり戦乱の中で、次々に国は滅んでも、黄河の水が兵器に使用されたことはなかった。盟約は守られ「人間にはなお信じていいものがある」と蔣薑は思う。彼もまた、戦争によって国を無くした遺民であった。

新蔡に生まれた蔣薑は、少年の頃、「上蔡の城邑は半ば廢墟」であったが、「新都・新蔡の城邑は充分美しく、充分立派なものに見え、そこに生きることに、言い知れぬ悦びと頼もしさを覚えた」という。昭侯十三年、新蔡に都替えしてから約二十三年後、蔣薑が十一歳の時、蔡は呉と結び宿敵の楚を破った。しかし、その夢のような興奮は、聽て楚の大きな復讐によって打ち崩される。十二年後の昭侯二十五年、新蔡の城邑は楚の大軍に囲まれ、その渦中に呉が介入し、何の前触れもなく、呉の支配下に入ることになる。一夜のうちに、呉の勢力下にある州来じゅうらいに遷都させられるという、めまぐるしい歴史の変化を、蔣薑は体験していた。蔣薑二十四歳の時であった。

「臨終の街」——蔡の民たちの間には様々な憶測が流れる。遷都を一か月後に控えた夜、武装した呉の大軍が城邑に入り駐屯する騒ぎがあった。楚に通じた蔡が、楚地深くに遷都する企みの虞があつての、呉の行動であるという。また、呉の指示する遷都先が「とんでもない瘴癘しょうれんの地」であるという。そのような憶測の飛び交う中、平素から楚寄り（筆者注：楚に通じた）の人物と囁かれていた公子・駟の死が伝えられた。それは「父昭侯の命で、公子・駟が、呉軍への申し開きのため」の死であったという。結局、州来への遷都が実行されることになった。

蔣薑は、自分の一族については、「大体に於てみな製陶とか、製骨とか」という仕事に関係していたと言い、そのようなことから推すと「国は亡びはしたものの、あの数々の青銅器を造る技術をもっていた殷人の血の流れ」を受け継いでいるのではないかと推測している。彼の祖父もまた、そのように考えていたという。

蔡の国を追われた蔦薑は、その後、陳都から宋へと、石材や水甕を運びながら旅を続けた。宋は、往古、一時期は殷の都があった場所であるという。その意味で、今の宋国は「中原に遺っている往古の殷という国の、ただ一つの形見である」ということになる。井上靖は、蔦薑を、殷の「ただ一つの形見である」「宋国」に立たせた。国を追われた蔦薑の辿り着く場が、その古里の淵源、或いは血の淵源に繋がる場に設定したことの意味は大きいと思われる。先の大江健三郎との対談の中で「私は殷のファンなんです」（注10参照）といった以上の意味が、そこには隠されていると思われるからである。

殷が亡び、周の天下になった時、王族の一人が殷祀を継ぐためにここに封じられ、宋が生まれたという。国は亡んでも、蔦薑には、この地は「心安らぐ場」となったのではあるまいか。蔦薑は「私は両親との縁が薄く、少年の頃、父を、そして母を相継いで喪いました」と告白している。また「家は代々、王城の中に貨幣鑄造の工房を持っていて、祖父も、父も、叔父たちも、生涯をそうした仕事で埋めていた」そうであると説明される。そして、亡命放浪の旅人となった孔子と蔦薑の出会いの場は、この宋都に設定されているのである。

宋都に落着いて、半月ほど経った頃でしょうか。十人ほどで、宋都から北方五日行程の農村へ、灌漑用の水路を造る仕事で出掛けて行きました。柳の木が多い、白い砂に塗れた全くの僻地の農村で、済水の支流の水を三本の水路に依って耕地に入れることが、私たちに課せられた仕事でした。

蔦薑たちは、水路工事の仕事をしていたのであり、それは当然耕地に関わる仕事であることがわかる。その仕事が終わり、明日は宋都へ引揚げて行くこうという日の夕方、宿舎に帰る村の入口で、また新しい仕事を依頼されたのである。その場面を引用してみよう。

衛国から曹国を経て、今日この村に入つて来た十数人の、身分ある旅行者の一人があるが、これから宋都を経て、

陳都へ向かおうとしている。その一行に同行して、陳都までの旅の一切の雑用を受持つてくれないかということでした。

その時、「私たちは二つ返事」で、その依頼を承諾したとあるから、薦薑だけではなく、これまで仕事に従事していた村人たちが、この仕事を引き受けたということになる。この一行が、師・孔子の一行であり、「私がたとえ遠くからであるにしても、子のお姿をというものを眼に入れたのは、この時が初めてで」あったのである。子のお傍には、子路、顔回、子貢がいた。そして、この時の孔子一行が目指していたのは、黄河の水を武器とはしないという盟約が結ばれた、あの蔡丘の丘であった。

薦薑が、孔子に惹かれる契機となったのは、同行した際に見た「異様な光景」である。夕刻から烈しい雷雨に見舞われ、予定を変更して無人の農家にはいった。そこは屋根と土間とがあるだけの、吹き曝しのあばら屋であった。その雷鳴の中に、端坐する孔子と弟子たち、付き添いの数人の人たちがいたのを見た時である。「この雷光、雷鳴の夜、私は生れて初めて、私の思ってもみたことなかった人間の一団のあることを知ったのであります。」と説明されている。そして、「この一夜がなかったら、私は宋都に於て、あるいは陳都に於て、子の一行から、子の教団から離れていったのではないかと思われます。」と述懐している。すでに指摘されているように、(註1)井上靖は論語「郷党第十」の「迅雷風烈」を、効果的に二度作中で用いた。その一つが、この場面である。もう一つは作品の末尾である。そこには、次のようにある。

烈しい雷光ですが、そのまま、お坐りになって下さい。暫時、迅雷風烈に、面を打たせ、心を打たせ、天地の怒りの鎮まるまで、ここで、そのまま、心を虚しくして、坐らせて頂いておきましょう。(第五章、末尾)

三十有余年前の、宋都の荒屋で見た、孔子一行の行為を体現する薦薑が、末尾に描かれて作品は閉じられる。奥山

の里で、孔子研究会の人たちに語りかけて来た蔦薑は、この日、ついに孔子の処世の仕方と重なったとみるべきだろう。因みに、時宜を得て事行われるとする井上靖の考え方は、既に早く、郷里伊豆の思い出に繋がる「養之如春」の語から確認することができる。^(注12)

なお、蔦薑の名づけ親は、「中国文芸界の指導者・夏衍先生」^(注13)であることを、井上靖は明かしている。「蔦薑、——これが私の、一応世の中で通用している名前でございます。ゞえんきょうと読みます。ゞひね生薑^{しょうが}とか、ゞ萎れ生薑^{しんが}とかいった意味で、あまり香しい名前とは言えません。」とある(第二章)。そういう意味では、この語り手は、子の夢であったとされる「隠者」を、密かに実践している人物かも知れないと思う。

(三) 蔦薑の負函再訪の意味

『孔子』執筆に際して、作家が執着した負函とは、一体どのような地なのだろうか。作品に取りかかる準備のため、井上靖は、一九八一(昭和五十六)年九月の曲阜(魯都)を最初に、山東省に二回、河南省に五回の旅を重ねている。そして、作品執筆中の一九八七(昭和六十二年十一月には負函を訪ね、その地を特定することができたという。この委細をしるした「負函の日没—『孔子』取材行—」(『新潮』第八十六卷第九号、平成元年九月号)に「一九八七年十一月の信陽の旅に於て、それまで私にとって、幻の都邑以外の何ものでもなかった、楚のゞ負函^{ふくくわん}の故地に、私は自分の足で立つことができた。」とあり、「旅の収穫」と「悦び」を表現している。その後、また、次のような記述がある。

この負函の問題が解決しない限り、私の場合、小説「孔子」の後半のペンを執ることはできなかつた。孔子を主

人公にする私の小説に於ては、往古の「負函」なる町の受持つ役割は、極めて大きかったのである。幻の集落・負函こそ、孔子と、その門弟たちの、楚に於ける滞留を、多少でも具体的に描くことのできる、ただ一つの、大切な舞台であった。

ここにいう「この負函の問題」とは、何か。また、この問題が解決しないと、「後半のペンを執ることはできなかった。」とまで、作家はいう。孔子を主人公とする「私の小説」にとつて、「負函」とは、一体、どういう意味をもつのだろうか。『孔子』第一章に、一団が目指す負函の郊外に入った時、子路が代表して長官・葉公に会い、孔子の人柄を聞かれたというエピソードが挿入されている場面がある。論語の「葉公、孔子を子路に問う。子路、対えず。」の場面である。この時、井上靖は、孔子の人間的魅力を引き出そうとした。(注14)この場面以降、蔦薑の語りは、人間・孔子の特色、魅力を説くことに比重が置かれるようになる。

その翌日、検問所からの報告によれば、夜の明けのを待たないで、昭王は、十数騎を従えて前線へと出かけて行ったという。葉公は楚国の大官である。今、楚は陳国を舞台に宿敵・呉と戦っているのであった。葉公からの口上によると、王はいつ帰るかはわからないけれども、いずれ負函に戻ればお目にかかるというものであった。滞在中、孔子は負函の町の隅々を歩いた。「――近き者説よびび、遠き者来る」。理想の政治の行き届いた国として、子は、そのことを葉公に伝える。「近者説、遠者来」。蔦薑は、その時の様子を次のように伝えている。

その六字の政治論こそ、子が負函の町を、何回かに亘って、隅から隅まで歩き廻られた果てに、葉公の政治に対して持つことができた讃辞であつたらうと思います。

蔦薑は、「私は今、この奥山の住居を出て、訪ねてみたい所を一つ挙げよと言われたら、遠い昔、子のお供をして入った負函という町を選びます。」という。何故か。その理由を「濃い闇に包まれた、その集落の夜を歩いてみたい

からであります。四十三年前の夏、私たちは真暗い深夜の町を歩きました。」と説明する(第二章)。星一つない真暗い夜、「私は左から子に寄り添うようにして、子と並んで歩いた。「あとにも先きにも、子に對して、このようなお供の仕方は」なかったという。実はこの時、彼らは葉公から、昭王の死を伝えられていた。子が迎えたのは、戦死した昭王の柩であった。「帰らんか、帰らんか。」という、子の「雄叫び」のような決意の「宣言」が発せられたのは、この時である。

昭王の柩を迎えた夜、失意の子に寄り添って歩いた夜、蕪薑には、初めて孔子の真意が理解できたという自覚が生まれたのではなかったか。遠くから仰ぎ見る存在でしかなかった、子の心に通う蕪薑の立場が、この時から明確になる。第五章における負函への再度の旅以来、まさに蕪薑が主人公として、作品が展開されている。「孔子を主人公にする私の小説」(井上靖「負函の日没」・前出)は、後半では特に、「蕪薑の物語といった趣き」(曾根博義「解説」五〇六頁、前出)が強くなる。その契機は、孔子の悲痛を知った負函の夜に淵源し、その場所への再訪の実践以来、より鮮明になつてくる。

蕪薑の負函再訪の決意は、作家・井上靖自身が、河南省信陽の「楚王城遺跡」を訪ね、そこが、かつての負函であると特定したことの事実と、大きく関係していると思われる。負函という地名が、『春秋左氏伝』にただ一箇所、「蔡の遺民を負函に致す」に確認できるのみであることは、井上靖が繰り返し述べている。孔子が、二千三百年前に「帰らんか、帰らんか」と決意して後にした負函の地、そこは特別な場として、作品に取り込まれた。蕪薑は、孔子の負函滞留の大きな目的が、昭王に面会し、弟子たちの仕官を願うことであつたと考える。そうすることによって、それぞれの優れた個性が、孔子の目指す理想の国家を建設できると信じたからである。

孔子の真意は叶えられず、一行は魯国への帰途だったのである。蕪薑が孔子を生涯の師と仰ぎ、今も、その教え

を説き続けるのは、負函での滞留の意味と、離国の意味とを考える行為に通じている。深い闇の中の思い出は、やがて燈火の灯る町へと変貌する。負函再訪の旅の目的は、その燈火を確かめる為のものであったのではないか。

蔡の遺民だった蔦薑には、幼い頃より、父も母もいなかったとされる。誇り高き殷の血を引きながら、祖国を失うことにより、その来歴には、郷愁や望郷、思郷の念が色濃く投影されている。「私は人間と人間との関係で、一番好きなのは子弟の関係」であるという井上靖は「数え年六歳の時から小学校六年まで、都会で住んでいる両親と離れて郷里の伊豆の山村の、小さい土蔵の中で祖母と二人で暮らした」という（私の自己形成史」昭和三十五年五月〜十一月『日本』に掲載、全七回）。「祖母」というのは、彼の曾父母の妾だった女性である。

作家にとって、血縁関係のない祖母との暮らしは、後の自己形成に少なからず影響を与えた。そのような環境の中で人となった作家は、師弟関係について、「私は何ものかを教わったということ弟子である。師はあくまでも私にとって厳格なものであっていいし、私はどこまでも師に対しては師弟の礼を以て接しなければならぬ。」（私の自己形成史」という。

蔦薑に負函再訪を思い立たせたのは、作家井上靖の、故郷（古里）願望に通ずるものがある。それは「心安らく」場としての、みずからの原郷を訪ねる旅でもあったに違いない。しかし、そこは、同時に「近き者説び、遠き者来る」郷でなければならぬ。秦敬一「『孔子』論——『負函』の構図——」（『語文と教育』第十二号、平成十年八月三十日発行）に「改めて『負函』という土地を考えてみると、ある意味で井上靖の故郷と生い立ちといったものが、この『負函』と蔦薑に置き換えられているのではないか」という指摘がある。だが、「ある意味」ではなく、そこは、もつと直截的に、井上靖その人の、最も希求する場として設定されているように思われる。

そこは、「逝くもの」の行きつく場、今、「燈火が」灯される場としての負函であり、かつて子とともに歩いた負函

でありながら、内実は、決してそうではない。「四十何年か前の時と同じように、地上は暗く、空は灰明るく、大平原のまっただ中に置かれている集落には、今や点々と、燈火が灯りつつありました。」(第五章)。「火の焚かれる時刻なのです。」とあるように、そこには人々の暮らしがあり、そして穏やかな日々の時が流れる場なのである。

薦葦の負函再訪の目的は、往年の葉公ゆかりの地で、そして孔子と過ごしたゆかりの地で、子の「お詞」の意味を考えることにあった、と作品では説明される。漆黒の闇に包まれた、しかし星の明るい負函の町——そこは今、軍の要塞の町として変貌していた。

四十余年前の、あの四方、八方隙だらけの、ふしぎな大平原の集落、あの独特のたたずまいは、今や、その片鱗をも発見することはできません。頑丈な城壁に囲まれた、押しも押されもせぬ、堂々たる楚・一線の城邑であります。

——「甲冑で身を固めた大平原の集落」。そこは、かつて孔子が葉公を称えたような「初々しい政治の町」では、もはやなかった。しかし、薦葦は考えるのである。「負函という町における、亡ぼされた国の人たちだけの住居地帯」、「この地帯を歩いて、判ったことですが、国というものが失くなっている連中には、この地域はなんとも言えず気持ちの休まる、特別な場所であろうかと思えます」と。

そして薦葦は、かつての「負函という不思議な町」を思い浮かべて、そこが「子を真ん中にした子の一団の、心の故里というか、郷里というか、兎に角、特別な心の拠り所のある集落であった」ことを自覚する。秦敬一氏の指摘するように(前出「『孔子』論—「負函」の構図—」、「『孔子』は、語り手・薦葦と作家・井上靖の生涯が、「二重構造」を持って成立する作品である。だが、孔子を語る薦葦の物語は、負函の地を境に、一重構造の物語へと転換する。つまり、「孔子」を語り終えた人の、安堵の息遣いを感じ取ることができるのであり、そこには、語り手と作者とが重

なり合う場としての、負函の地がある。

おわりに

語り手の薦葦は、蔡の国の遺民として設定された。それは、国を追われたデラシネの民としての彼の運命が、孔子の思想を深く受け入れることのできる資格を与えたことによる。作家井上靖は、論語が戦国動乱の世に生まれた思想であることを繰り返し強調する。そして、孔子の十四年間の旅と、これに同行した薦葦は、絶望の歎きは、師・孔子には存在しないことを知る。天命と仁とは、決して高邁な観念的思想ではなく、我と我が身近な現実の日常に浮遊する、生活の中にある真理であることを、孔子の言説によって知らされる。

川の流れも、人間の流れも同じである。時々刻々、流れている。流れ、流れている。長い流れの途中にはいろいろなことがある。併し、結局のところは流れ流れて行って、大海へ注ぐではないか。／人類の流れも、また同じことであろう。親の代、子の代、孫の代と次々に移り変ってゆくところも、川の流れと同じである。戦乱の時代もあれば、自然の大災害に傷めつけられる時もある。併し、人類の流れも、水の流れと同じように、いろいろな支流を併せ集め、次第に大きく成長し、やはり大海を目指して流れて行くに違いない。(第二章)

薦葦は川の上に佇む孔子の感慨を、このように要約した。薦葦が、負函を再び訪ねたのも、孔子の理想とした旧都への思いがあったに違いない。作家井上靖が、その負函の地に立った時には、二千三百年前の理想の都市への遡行の感慨とともに、孔子の心中深くに封じ込められた真実への追体験の興奮もあっただろう。

井上靖に、「黄河」と題する詩がある。その直筆が『井上靖展—文学の軌跡と美の世界』（毎日新聞社、一九九二年）平

成四年）九月三日発行）に紹介されている。「黄河は巨大な龍である」で始まる。人々は、太古からその龍の腋や腰や足指のつけ根あたりに棲みついて、瓶や野菜をその流れで洗いながら、今日もまた明日も、ひそやかに虔しく生きていくという内容である。以下、次に続く部分を引用してみよう。

夕闇が迫ると、川明りがそうした河岸の集落に独特の表情を持たせる。一日が終わったという安堵と淋しさが、村人たちを無口にし、石積みの家々を砦のように不愛想にする。そして川明りのたゆとう極く短い時間のことではあるが、集落を横切って行く旅人たちの心を、例外なく永劫という想いがよぎる。一日に一回、黄河という巨大な龍が、己が上に抜がる天を見入る時なのだ。

詩の前半部は、黄河の懐に抱かれて生活する人々の姿が描かれる。彼らは「ひそやかに虔しく生きている」という。それは、「龍を忿らせないように」との思いからである。人々は龍の恩恵に支えられて生きている。その龍さえもが、「己が上に抜がる天」を仰ぎ見る時がある。自然の摂理の悠久の時の流れに、逆らうことはできないのである。

孔子の一団は、揺蕩う利那を生きる旅人となつて、未来永劫の世界に向かって歩み続けたのである。薦葦の語りは、「天」を説くこととはしない。すべてが「天命」であることを説き、「逝く川」の彼方には、理想の世界があることを暗示するのみである。そこに、人が生の哲理をみることに、何の躊躇の入る余地があるだろうか。井上靖『孔子』は、薦葦の語りを通して、みずからの来し方を語り、行方を確信的に語る、作家の信念が投影された作品なのである。作家に於ける揺蕩う利那の心情があるとすれば、祖母との思い出と、父母に繋がる心のふるさとへの回帰、または憧憬であったらうか。

(注)

(1) 井上靖『孔子』を語る(新潮カセット講演テープ、一九九〇年二月二十日発行)参照。また単行本『孔子』(新潮社、平成元年九月十日発行)の帯に「作者は『論語』の成立過程を追って、中国にその足跡を訪ねること六回。ここに二十年來の悲願を達成した。」と刷り込まれている。

(2) 大江健三郎との「対談『孔子』について」(『新潮』第八十六卷第十一号、平成元年十一月号)の中で、井上靖は「江戸幕府は君子を江戸の若い官吏の理想的タイプにしました。それで彼らは勉強しました。喧嘩もしなかった。それが三百年は続いた。これは決して悪くはないことだったでしょう。だけれども、『論語』というものの本当の精神というものからはずれた。それを多少、幾つか指摘したことがあった。そうしたら貝塚さん(筆者注：貝塚茂樹)が、全部判っています、おっしゃるとおりです。でも、江戸の『論語』があったために、明治の近代化へ入っていった」とする貝塚の発言を紹介している。

(3) 井上靖「負函の日没―『孔子』取材行―」(『新潮』第八十六卷第九号、平成元年九月号)参照。この中で、作者は「春秋の初期には、既に周辺の集落とは異なつて、大きい構えをもつたこの城邑は造られていた筈である。そこへ蔡の遺民が入つて来て、この時、町は更に大きくなつたに違いない。」と当時の「負函」の様子を推測している。

(4) 「インタビュー」井上靖氏に聞く―『孔子』から『わだつみ』へ―(『文学』第一卷第一号、一九九〇年冬号、岩波書店)に拠る。聞き手は編集部。井上靖の発言の中に「『論語』そのものは、平岡武夫さんの『全釈論語』(漢文大系第一卷、集英社、一九八〇年)に拠りました。」とある。

(5) 井上靖・大江健三郎「『孔子』について」(『新潮』第八十六卷第十一号、平成元年十一月号)参照。この対談の中で、井上靖は、「憤りを発して食を忘れ、楽しんで以て憂いを忘れ」の例を挙げ、孔子の詞が、現実的な生活の中に発せられたものであることを強調している。

(6) 下村湖人『論語物語』(旺文社文庫)(旺文社、昭和四十一年九月一日発行) 参照。引用は二三五頁〜二三六頁。「序文」には、「孔子は一生こつこつと地上を歩きながら、天のことは語るようになった人である。天のことは語ったが、彼には神秘もなければ、奇蹟もなかった。いわば、地の声をもって天のことは語った人なのである。」(三頁)とある。

(7) 井上靖は三好行雄との対談の中で「歴史上の事件」「歴史的人物」を書いたものを「歴史小説」、それ以外の時代小説を「娯楽小説」と区別する。また、「敦煌」「蒼き狼」など史実の少ないものは、「小説家の責任においてフィクションで辿ってみよう、という感じなのです。」と語っている(『國文學』第二十卷第三号、昭和五十年三月号)。

(8) 新潮文庫『孔子』(新潮社、平成七年十二月一日発行)「解説」(五〇六頁)。特に、第五章を「蕪薑の物語」とみることによつて、その後の蕪薑の負函再訪のモチーフが、より鮮明に浮かび上がることになる。負・函に籠められた地名(町名)の考察も必要と思われるが、ここでは余裕がない。但し、井上靖は「絶筆」負函(『新潮』第八十八卷第四号、平成三年四月号)で「調べてみると、果たして普通の、そこらに散らばっている、平凡な集落ではなかった。負函なる二字は、危険地帯(或いは難所)を負負っているという意味」だとしている。

(9) 但し、蕪薑は、自分を「隠者まがい」と表現し、「隠者」とは断言していない。従つて、ここでは孔子が「現在の私が送り迎えているような生活」を「お持ちになりたかった」と蕪薑が推測するとき、正しくは「隠者まがい」の生活ということになる。孔子が、蕪薑の推測するような生活を希求していたか、どうかは不明だが、このような表現から、孔子・蕪薑の一体化を図る作家の意図が窺える。

(10) 井上靖は大江健三郎との対談(注5に同じ)の中で「私は股のファンなんです。」と語り、青銅器や文字の文化を挙げている。また、上蔡と新蔡の解釈が、漢書では上蔡が五百年、新蔡が四十年足らずの歴史だとあるが、史記ではその逆になっていることを指摘している。作品では、漢書の通りに書いたとしている。つまり、新蔡を生国に持つ蕪薑は、不安定な政情の中で、歴

史に翻弄され、故郷を喪失した人物として設定されたことになる。

(11) 勝呂奏「井上靖『孔子』ノート——『迅雷風烈』(『奏』第六号、二〇〇三年十二月五日) 参照。同論文には、手術後の井上靖が、「天命への理解」を中心に「孔子」を脱稿したことが説かれている。

(12) 井上靖「養之如春」(『婦人公論』昭和三十五年一月号、別冊付録)に「私の郷里伊豆の家の二階の座敷にかかっている横額の言葉」とあり、「私は小さい時から、この言葉を見て育って来ているので、この言葉は郷里の家の柱や天井板と同様に、私は特別な親しさと、特別な懐かしさを持つものである。郷里や郷里の家の匂いと同じ匂いを持っている。」とある。その言葉を、「春の光が万物を育てるように、凡そ人生のこと柄というものは気長にのんびりとやるべきである。」と解釈している。そして、何事についても「一朝一夕にそれを育て上げる態度をとるべきではない。」とするみずからの座右銘として位置付けている(引用は『故里の鏡』中央公論社、昭和五十七年八月十日発行、十三頁)。

(13) 井上靖「中国の読者へ」(鄭民欽訳『孔子』(中国人民日報出版社、一九九〇年三月)の序文(未見)。引用は、『井上靖全集』別巻(新潮社、二〇〇〇年四月二十五日)、二八二頁)。

(14) この時、子路は孔子の人柄について、緊張の余り、うまく説明ができなかった。そのことを聞いた孔子は、「憤りを発して食を忘れ、楽しんで以て愛いを忘れ、老いのまさに至らんとするを知らざるのみ。」と答えればよかったのに、と伝えた。作品では、孔子は自らの性格や態度をここで表明したことになる。井上靖は、「ここにもみる孔子の詞は、孔子の面目躍如としていて、素晴らしい。」と称え、「その場には葉公は居ないが、併し、当代一流の文化人・葉公に答える詞として、孔子は自分という人間を、ありのまま、直截に語っているのである。」と解説している(前出「『負函』の日没——『孔子』取材行」)。

〔附記〕

本稿では、井上靖『孔子』（新潮社、平成元年九月十日発行）を底本とし、新潮文庫『孔子』（新潮社、平成二十四年九月二十五日、二十九版）を参考にした。なお、ルビは適宜取捨した。また、ここに参照、引用させて頂いた文献については、すべて本稿中に（注記）した。書誌に関しては、『井上靖全集別巻』（新潮社、二〇〇〇年四月二十五日発行）所収の曾根博義編「井上靖作品年表」を参照させて頂いた。文献の刊記については、原本の表記に従い、西暦・和暦のママとした。

（はんだ よしなが・皇學館大学特別教授）